

公益財団法人 福武財団

地域振興助成

2019年度 アートによる地域振興助成
成果報告書

団体名 金ケ崎芸術高等学校
実施場所 岩手県 金ケ崎町

代表者名 千葉周秋
実施期間 2019年9月1日～11月4日（コア期間）

活動の目的

国選定重要伝統的建造物群保存地区（伝建群）にある保存物件を舞台に活動している。特に、岩手県出身の宮沢賢治が農村生活の改善と農民芸術の実践の場として設立した「羅須地人協会」の理想郷を妄想しつつ、現代的解釈を試みてきた。その根幹には「生活そのものを芸術とすることは可能か」という本質的な問いがある。

活動の内容

金ケ崎芸術高等学校では、金ケ崎町の掲げる生涯教育の理念を踏まえ、それぞれの興味関心や得意分野を持ち寄った「開校日」を通年で開催している。2019年度も、敷地内の畑で育てた藍で染色をする「藍の時間」や塗り箸をつくる「うるしの時間」など40を超える企画を実施した。城内農民芸術祭は、そのような高等学校の日常から立ちあがるハレの場として構想したものである。開幕行事の「神楽の時間」では、県内の神楽継承団体による権現舞を奉納した。会期中には、生活と芸術とが混然一体となった実践に取り組む先人を招いてのプロジェクトを展開した。多くの人々が関わりながら変化していく風景に伝建群の新たな可能性を感じる刺激的な日々であった。

参加作家、参加人数

きむらとしろうじんじんによる「野点」は台風の影響で1日延期しての開催となったが、100名超の人々で賑わった。黒田瑞仁は、伝建群を演出家目線で捉える参加型のリサーチプロジェクトを行った。会期終盤には、矢口克信が野外展示で用いた注連縄を焚き上げる「どんどこ焼き芋まつり」を開き、多くの子どもたちが集まった。

他機関との連携状況

高等学校の運営は、伝建群で活動を行う「金ケ崎まちづくり研究会」や「えぐねの会」などの住民団体の協力のもとに成り立っている。また、芸術祭の実現には東北芸術工科大学の学生有志によるサポートも不可欠であった。

活動の効果

金ケ崎町では、伝建群選定後も生活空間としての質の担保を重視し、観光地化を進めてこなかった。その一方で、近年では地区内の少子高齢化に伴い空き家が増加しつつある。芸術高等学校が拠点とする待住宅も長きにわたって無住状態にあった。今回の芸術祭では、のべ300名を超える来訪者が出入りすることで、人々が集う「家」としての機能が拡張されていった。一連の実践には保存物件の創造的活用モデルとして有効性が認められる。

活動の独自性

城内農民芸術祭という事業名には二つの意味を込めている。第一に冒頭の「城内」は、実施場所がかつての金ケ崎要害の城下町であることを示すとともに、高等学校が位置する自治会の名称でもある。本事業の特徴の一つとして、ほぼ全ての企画を一軒の待住宅の敷地内で行ったことが挙げられる。大規模化から逆行し、一人の人間が把握し得る範囲での芸術祭のあり方を試みた。

第二に「農民芸術」の術語は宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」から援用している。そこには「誰人もみな芸術家たる感受をなせ」という件（くだり）がある。芸術を特別な誰かのものとして独占するのではなく、芸術と生活とが無理なくつながるような状況をつくりだすための実験の場を思い描いた。

総括

城内農民芸術祭にはいわゆる「作品」はほとんど出展されていない。唯一野外作品として展示されていた矢口克信による《風と俗》も、あたかもずっとそこにあったかのように佇む注連縄である。キャプションも置かれていない。その意味において、きわめて地味な芸術祭であった（きむらとしろうじんじんの真つ赤なドレスを除いては）。言葉を換えれば、「見せる」ためではなく、「ただそこにある」だけの芸術祭だったのかもしれない。ここに「農民芸術祭」たる所以がある。

元来、芸術は特別なサービスとして消費する商品としてではなく、繰り返される日常（ケ）から育まれる営みの中にあった。そこでは誰もが意識するしないにかかわらず、文化創造の担い手になり得た。

今回も、庭先に権現様が訪れたり、畑仕事をしたり、器に色を付けたり、家で演じたり、庭を眺めたり、市を開いたり、芋を焼いたり……一つひとつの場面に日常を少しだけ拡張するような風景が見られた。そこでは参加している一人ひとりがまさに「芸術家たる感受」を発揮していたのではなかろうか。

これからも、金ケ崎芸術高等学校では日常の延長線上に「芸術がある」という状況を自然体でつくりあげていきたい。



開校日「神楽の時間」における権現舞の奉納



きむらとしろうじんじん「野点」点景



芸術祭の開幕行事「どんどこ焼き芋まつり」

団体名
実施場所Don't Follow the Wind 実行委員会
福島県（及び東京都） 帰還困難区域内および周辺地域代表者名
実施期間卯城竜太
2019年4月～2020年3月

活動の目的

将来公開される展覧会の「予告編」をコンセプトとした映画を作るための撮影に着手。これまでに撮りためた膨大な撮影記録に加え、福島県の避難区域内外での新たなインタビューや、今しか撮影できない場所・風景を記録に収める。そして今後の映画上映や資料展示のための候補場所を福島県内の住民の方々の協力を得ながら探す。

活動の内容

- ・東京都内で実行委員会を開催
- ・避難区域内の本展会場で作品メンテナンスや掃除、また参加作家一名の作品のための放射線調査
- ・会場の経年変化を見るための定点撮影
- ・区域周辺の視察
- ・避難者の方々、地元協力者の方々との交流、映画のためのインタビューなどを撮影
- ・VR映像展示用のヘッドセットを新たに制作
- ・ニューヨーク、香港でのVR映像作品の展示、パルセロナでプロジェクトの発表
- ・2020年3月の避難区域の再編に合わせ「Don't Follow the Wind」のホームページを更新。元住人の方が語る新しいオーディオトラックを公開
- ・英語圏向けの出版物の制作

参加作家、参加人数

参加作家 : Chim ↑ Pom、竹内公太、グランギニョル未来、
Nikolaus Hirsch、竹川宣彰、小泉明郎（6組 14名）
キュレーター：Jason Waite、窪田研二、Eva and Franco Mattes（4名）
カメラマン : 森田兼次、他
実行委員 : 上記以外 2名（写真記録、映像記録、音声記録）
他、地元の協力者の方々

他機関との連携状況

- ・避難区域自治体に施設見学や作品設置、取材など協力を得る
- ・「The Influencers Festival, CCCB（パルセロナ）」、「K11 Art Foundation（香港）」、「Art in General（ニューヨーク）」で展示・情報発信の機会を得る



Don't Follow the Wind, Collective on project site visit



Installation of Non-Visitor Center at Extra City, Antwerp, Belgium



Installation of Non-Visitor Center at Extra City, Antwerp, Belgium

活動の効果

5年間の活動の継続性、国内外の展示やイベントなど発信機会の多様性、出版物・ウェブ媒体・映像・VR映像など形態の多様性が、被災地の「その後」への注目を持続的なものになっている。

活動の独自性

避難区域の立入制限が解除されるまで観に行くことができない展覧会として開始し、5年が経過した。プロジェクトが長期にわたり、かつ一般来場者の訪問条件が整わないという状況が災害の余波を伝える独自の手法として成立している。

現地訪問が制限された状況では、記録の重要性が増す。展覧会自体のため、また災害の記録として、各種媒体で記録画像や映像を発信する。

それとは別に、展覧会を象徴する公式ウェブサイトは画像や文字を掲載せず、音声コンテンツによって訪問者の想像力を促す趣向である。2020年3月11日に発表された音声には、復興工事で変わりゆく故郷の風景に対峙する避難者の語りが加わった。

場所の制限を逆手に取り、情報発信を工夫することで、長期にわたる制限の困難さと紋切型で捉えきれない複雑な被災者感情を表象している。

総括

2019年度は「映画を作る」という展覧会とは別の軸を作り、活動内容に広がりが出た。地域の協力者との連携で得た、変動する避難区の風景や人々の心情を捉えた撮影素材は、現状の学びとなり、将来的に貴重な記録となる。2020年3月の避難区域再編に際し海外から批評家を招いて実地散策、発信内容に外側からの視点を加えられた。

2020年、新型コロナウイルスという地球規模の厄災下、DFWも地元住民の方との会合や県をまたいでの移動を自粛したり、放射性廃棄物の中間貯蔵施設見学会が中止されたりするなど、活動の重要な軸である「交流」がままならない場面があった。

同年4月現在、国内外の文化施設で休業・休館が続いている。「見に行くことのできない展示会・無観客のイベント」が世界中に立ち現われた状況は、特殊と評されることの多いDFWについて、皮肉にもその普遍的な側面を追認する機会となった。ただ、被災者視点に立てば、放射能汚染によって自宅に帰ることが叶わない人たち、ウイルスで自宅にいなければならない人たちの状況は真逆とも言え、原発事故と感染症流行を同様のカテゴリーに収めるのは早計だ。DFWは結論を急がず、刻一刻と変化する状況にその都度議論して対応する。それは長期に渡る非常事態と粘り強く付き合うために必要なスタイルだ。あえて言えば、個別の知見や工夫より、こうした姿勢そのものを広く社会と共有することが、ウイルス禍の世界におけるDFWの意義と言える。次年度も記録と議論を怠らず、その時々状況に柔軟に対応しながら活動を継続する。

団体名
実施場所TOKYO CANAL LINKS 実行委員会
東京都大田区、品川区、港区 京浜島、天王洲、高輪代表者名
実施期間伊藤悠
2019年度 10月～11月をコア期間として一年通しての企画

活動の目的

京浜島、大田市場、天王洲、高輪をつなぎ、「TOKYO CANAL LINKS」として一つの面にしていく。

活動の内容

羽田～京浜島では地場産業とアートとのコラボレーション、天王洲ではアートマルシェ、高輪ではアートフェアを行い、点をつなぎ一つの面にしていく。

「鉄工島 FES」は一つの発火点となり、鉄工所の文化的な価値に多くの方々が触れる機会を作ることができたが、次のステップとして羽田地区から範囲を広げ、京浜島、天王洲、高輪をつなぎ、「TOKYO CANAL LINKS」として一つの面にしていく。

参加作家、参加人数

参加作家：SIDECORE / 西野達 / 快快 / さわひらき curated by 中野仁詞 / ㇔ Y ㇔ / 市川平 / 中島崇 / 鯨 / ケケノコ族 / VISCUM FLOWERSTUDIO / INDUSTRIAL.JP / 平田尚也 /

参加人数：3,000人（フリースペース含む）

他機関との連携状況

アーツカウンシル / 大田区 / J-WAVE / 須田鉄工所 / 北嶋紋製作所 / 糸びす興運 / ムソー工業 第一工場 / 清新工業所 / 光機械製作所 / 池田印刷 / 西商店 / BUCKLE KOB0

活動の効果

今年の活動により、AERA dot. での「OMATSURITOKYO」や「地域人」にとりあげていただいた。

制作にあたり、アーティスト、リサーチャー、工場のメンバーとのコミュニケーションが生まれ、工場のメンバーも単に場所を貸すのではなく、自分たちも積極的に参加し、出演し、祭りを共に作りあげてくださった。そのことにより、来年度の展開もみえてきた。

活動の独自性

2019 年は、地域の歴史を紐解き、その地域に残る文化を掘り起こすことができた。

地理的、歴史的に縦に横にリサーチするところからスタート。そのリサーチ結果は、高輪での「TOKYO CANAL LINKS」にて発表していただいた。発表いただいたリサーチから「羽田節」に焦点を当て、「快快」の新しい作品ができた。

総括

羽田にかけては水辺の文化が栄え、「羽田節」という漁師がもともと車座で手拍子だけで歌う民謡が昭和 30 年まで残っていたという。

今回は、「快快」主宰の北川陽子、日本の祝祭とアジアを中心とする各地の地域文化を追いかけるライター大石始とリサーチするところからスタートした。

そして、このエリアならではの祝祭のあり方を提案できたと考える。

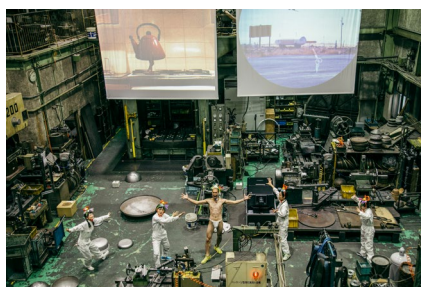
<https://dot.asahi.com/brandstory/1910wwtokyo/2020010800091.html>

（ドキュメント限定公開）

<https://youtu.be/vJGLoZs3LXs>



北嶋紋製作所での快快パフォーマンス「HANEDABUSHI」の様子



北嶋紋製作所での快快パフォーマンス「HANEDABUSHI」の様子



北嶋紋製作所での快快パフォーマンス「HANEDABUSHI」の様子

団体名
実施場所特定非営利活動法人 クロスメディアしまだ
静岡県 島田市・川根本町代表者名
実施期間大石歩真
2019年4月1日～2020年3月31日

活動の目的

大井川鐵道の走る島田市及び川根本町において、無人駅エリアは過疎エリアである。無人と呼ばれるエリアにおけるアートを手法とした地域再生の取り組みであり、集落に息づく「記憶」「風景」「営み」を掘り起こし表現することで様々な交流や関係を生み出すことを目的とした。

活動の内容

2020年1月より、アーティストがヌクリハウスに滞在しながらの作品制作がはじまった。

集落の人々の滞在中のおもてなしを受けながら開幕に向けた作品制作やプロジェクトが進んでいった。制作は、集落の人やサポーターも多数協力した。新型コロナウイルス感染拡大を受け、関連イベントは全て中止となったが、作品発表は予定通り行うことができた。規制ある状況下ではあったが、集落の人々、サポーター、アーティストの交流が密に行われながら全国から多くの来場者が訪れた。

参加作家、参加人数

<参加作家>

関口恒男／江頭誠／さとうりさ／木村健世
北川貴好／栗原亜也子／ヒデミニシダ
夏池篤／中村昌司／形狩り衆／クロダユキ
カトウマキ／常葉大学造形学部

他機関との連携状況

島田市及び川根本町の社会教育課（文化担当）及び観光課、静岡県文化政策課をはじめ、大井川鐵道㈱、該当エリアの自治会、また市内企業や一般社団法人等多くの機関の協力や関わりの中で開催することができた。

活動の効果

無人駅エリアの「ヒト・モノ・コト」の魅力を、アートを手法に顕在化させることができた。例えば、ヒデミニシダの「境界のあそび場・浮かぶ縁側」は、当り前の茶畑の風景がアート作品となり連日多くの人が訪れた。栗原亜也子の「かみさまたちのまちじかん」も、「神の瀬」「佐澤薬師堂」という場がひらかれていくきっかけとなるなど、アートが地域のヒトやモノと組み合わせることで、これまで観光資源とは認識されてこなかった場所の力が新たに発信されていった。

活動の独自性

2つの市町をまたぐ鉄道に沿い「無人駅」をキーワードに開催をしている。「無人駅」を現代社会の象徴と捉え、情報化、効率化により無人化が進む現代の中、関係性やつながりの希薄さと共に人が減っていくという日本共通課題を浮き彫りにする。しかし、そのエリアでは今も人のつながりを大切に、豊かにいきいきと暮らす人々の姿があり、それらをアートを手法として発信することで、新たな気づきと発見、関係性を作る地域再生の取り組みである。

総括

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、関連イベントは全て中止という判断をしながら、作品発表は予定通りという形で運営を行ったが、大きな事故などもなく無事に閉幕することができた。予想以上に全国各地からの来場者があった。作品表現に関しては3回目の参加であるさとうりさの「地蔵まえ3／サトゴシガン」は会期前に作品を「サトゴ（里子）」に出すプロジェクトが先行して始まり、藤枝市～川根本町まで8組の家庭に滞在したり、2回目の参加となる江頭誠の「間にあるもの」は、江頭氏が「この芸術祭の一番の魅力は集落の人だ」という思いから、（集落の）人が作品になる、という自身初の試みとなったりなど、表現の中に「人」が多く関わったことが今回の大きな特徴となった。

集落の人々も自主的に作品の近くで緑茶のサービスを始めるなど、芸術祭に自分から関わりはじめる様子が見られた。

「ほりおこす」「あらわす」「ともにひらく」の3つのフェーズに沿って運営を行っているが、地域を「ほりおこす」ための素材としての歴史・時には負の歴史など、アーティストへの素材提供として運営側が掘りきれない部分もあると感じる。無人駅エリアに向けてアートを通じて「問題提起」していけるよう、次回開催に向けて準備していきたい。



さとうりさ／地蔵まえ3・サトゴシガン（抜里駅）



関口恒男／福用レインボーハット（福用駅エリア）



江頭誠／間にあるもの（抜里駅エリア）

活動の目的

12の市町を鉄道とアートによるプロジェクトで繋ぎ、固有の文化に敬意をもって発信し、新たな表現に繋げていく。作品制作を通じて地域住民と来訪者の交流の場を創り出し、芸術と日常生活についての考察を深める。

活動の内容

2019年初夏から12の地域に12組のアーティストが入り、きのくに線沿線に作品を制作した。

各教育機関と連携して、子どもたちと共に制作を行い、地域住民の助けを得て開幕までに作品が完成。会期中は地域に深く潜るように散策するローカルダイブツアーを各週末に開催。ゲストを招き独自の視点でまちにスポットをあてた。

そのほか、臨時アート列車が走行し、車窓アートを鑑賞しつつ、車内で音楽その他の企画を楽しみ、地域の食文化にも触れてもらう機会とした。

またローカルダイブアートでは鉄道を離れた地域の名所でプロジェクトを展開し、大勢の人が集う新たな展開の一歩となった。

参加作家、参加人数

【参加作家】岩塚一恵／加藤文子／杉原信幸×中村綾花／郷さとし／河合進／広谷純弘／山本祐也／木村崇人／半谷学／渋田薫／深尾尚子／宮寄浩／石田真也／小山和則／唐口一之 JAZZ バンド／Jimanica／円香／中西裕二

他機関との連携状況

田辺商工会議所、JR西日本、12の市町、和歌山県、観光協会、などと連携して事業を実施した。

活動の効果

各地域でアーティストが地域の人々との共同制作を行い、子どもたちを中心にアートに触れ、作品の一部になる機会を提供したことは各地の教育機関から評価を得た。

近年、海外からの来訪者が増加した地域にて、世界遺産の神社境内などで英語にも対応したアートプロジェクトを開催することで、地域の文化度を世界に発信する機会となった。

活動の独自性

鉄道で各駅にあるアートを鑑賞する過去5年間の企画から新たな展開として、今年は動く列車の車窓からアートを鑑賞する「車窓アート」を行った。作品前で列車が徐行運転し、作品解説を車内アナウンスにて放送。日常的なかの移動手段として利用される列車をアートの装置と見立て、紀伊半島を舞台に体験型のアートプロジェクトを行った。

総括

6年目となる今年は、アーティストと地域との関係を丁寧に紡いでゆくことを大切に、新企画である「車窓アートプロジェクト」に取り組んだ。

JRの所有地から沿線の地域にアートが出ていったことで、土地の借用に苦労したが、地域の人々の協力を得て実現することができた。地域との共同制作を取り入れたアートプロジェクトが各地で展開してゆくことで、各地域の文化的特性がアーティストと地域の人と共同で発信されてゆくこととなった点が成果だと感じている。

車窓アート鑑賞の臨時列車当日は、豪雨で運行中止するという初めての事態に見舞われたが、JR西日本の全力の対応を参加者や関係事業者が好意的に受け止め、自然の猛威の前にお互いに感謝する雰囲気が出ていったことが感動的だった。

地域外から訪れる人々と、地域に根ざして暮らしてゆく人々の文化的出会いの場を作り出す経験は今後のプロジェクトに繋げてゆける成果になった。



臨時列車「紀の国トレイナート号」車内



地域の人と作家による車窓アート制作



世界遺産朝熊神社での木もれ陽アート

団体名	のせでんアートライン妙見の森実行委員会
実施場所	兵庫県、大阪府 兵庫県川西市・川辺郡猪名川町、大阪府豊能郡豊能町・能勢町

代表者名	三好庸隆
実施期間	2019年10月26日～2019年11月24日

活動の目的

兵庫・大阪をまたぐのせでん沿線とその周辺地域を舞台に2年に1度芸術祭を開催。

アート表現を通じて地域の魅力を広く伝えとともに、参加者間の交流による新たな人の流れと新たな地域価値の創造をめざす。

活動の内容

国内外から8組のアーティストを招きアートプロジェクト、パフォーマンスを実施。2019年3月からフィールドワークやインタビュー、アウトリーチワークショップ等を通じて地域リサーチを行い、場の特性にあわせた作品を設置した。

地域ブランディング事業では、地域で活動する団体を対象に「地域プロジェクト」を公募。地域での新たな価値創造となる事業や取り組みを生むことを目的とし、12団体に資金助成等の伴走支援を行った他、期間限定のシェアサイクルも試験的に実施した。

他、地域団体と連携して飲食店や宿等の「周辺情報」や飲食店マップを作成し発信した。会期中は地域の内外から募ったサポーターと3か所のインフォメーションを運営した。

参加作家、参加人数

アーティスト：8組

ディエゴ・テオ（メキシコ）、渡邊 朋也 a.k.a. なべたん（山口）、深澤孝史（北海道）、岡啓輔（東京）、井上亜美（京都）、渡部睦子（オランダ）、拉黒子・達立夫（台湾）、コンタクト・ゴンゾ（大阪）

地域プロジェクト：参加団体12組

参加・入場者数：約22,500人

他機関との連携状況

実行委員会を通じた各自治体教育委員会との連携（アウトリーチワークショップの募集）、事業実施における各地域自治体との協働（告知、物件紹介などの情報提供）。

活動の効果

アートプロジェクトの過程で地域と関わりが生まれ、自治会や行政と連携し、空き家等の利活用が進んだ。電車を乗降しながら新旧の村落と里山を周遊させる鑑賞ルートの可能性を見出した。作品はどれも土地の文脈を深く反映しており、4作品を恒久設置に向けて調整している。地域ブランディング事業では地域プロジェクト参加団体への伴走支援により団体の組織化や団体間の連携が実現。周辺情報やシェアサイクルの導入も周遊性を高めた。

活動の独自性

府県をまたぎ鉄道でつながる沿線エリアを一つの地域と捉えて活動を展開。山間部に島のように開発されたニュータウン（新村落）や、キュータウン（旧村落）、里山を横断しながら、めぐり歩く芸術祭とした。テーマ「避難訓練」は2018年の大阪府北部地震や大型台風の経験から導き出されたものである。防災や災害を想起させるテーマを端緒としながら、各作品は自然と住環境が隣り合い、影響し拮抗しあってきた地域の姿と、地域に根付く信仰のあり方を捉えた。

芸術祭としての「避難訓練」はアートを通じてそれらを目の当たりにし、大小を問わない日常の様々な困難から回避する未来への経路を予感させ、精神的な避難場所を示すことが目指された。

総括

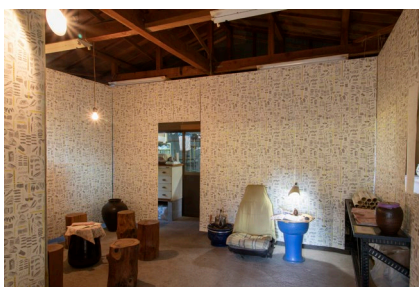
のせでんアートライン2019の特徴として、①テーマ「避難訓練」の斬新さ、②国内外8アーティストが全て新作を制作したこと、③地域リサーチを重ね地域住民と共に作った作品であること、④里山・自然だけでなくニュータウンにもフォーカスしたこと、⑤地域ブランディングの構築を目指し公募した12の地域プロジェクトの開催・支援を行ったことが挙げられる。これらを話題とし広報に力を入れた結果、新聞・テレビなどメディアにも多く紹介され、プレイベントを含む会期中には2017年度の約4倍の参加者・来場者があった。また、海外作家の参加により海外への発信効果が見られたことも今年度の特徴となった。

一方で、作品制作にあたっての地域への説明、安全性への配慮、許認可調整、進行管理などが課題として残った。

新たにスタートした地域ブランディング事業は、2013年度からののせでんアートラインで積み重ねられた人のつながりや地域での取り組みを生かし、芸術祭の成果を通年化していくことが目指された。2019年度は地域の新たな価値創造を生むべく様々な地域プロジェクトの伴走支援を行った結果、会期後にフリーペーパー企画や新商品の開発などの動きへと展開し続けている。



渡部睦子「星見る人たちと出会う旅」



ディエゴ・テオ「UBASTE」



深澤孝史「NEW TOWN MY HOME THEATER」

団体名
実施場所飛生アートコミュニティー
北海道 白老町代表者名
実施期間国松 希根太
2019年9月7日～15日

活動の目的

アートの森づくり活動や芸術祭を通して、地域社会と芸術文化の関わりを創出し、人々の居場所を増やすとともに、地域の文化、人、営みをアートの視点から見つめ、地域資源を再発見し発信していくことを目的とする。

活動の内容

春から秋にかけて行う森づくり活動では「アーティスト」と「地域住民」と「地域外から訪れる参加者」の三者が交流を重ねながら森の整備環境を整え、生態系に配慮しながら、創造的な森づくりを実施。

芸術祭ではアーティストが地域に飛び込み、リサーチを重ね、地域の歴史風土や多様な文化資源や人をテーマに作品を創作・発表する。TOBIU CAMPでは国内外から他分野のアーティストと世代を超えた来場者が集い、森と校舎を舞台に一昼夜、飛生独特の世界観を共有する。

参加作家、参加人数

奈良美智、羊屋白玉、OrganWorks、渡辺たけし、後藤正文、古川日出男、川村亘平斎、OKI、MAREWREW、鎮座 DOPENESS、森永泰弘、岡本仁、杉原信幸、石川直樹、田仲ハルと極北会、嵯峨治彦、森迫暁夫、木村崇人、浅井裕介、風間天心、清水郁太郎、西村理佐など

他機関との連携状況

近隣企業によるイベント時の土地の提供、協同組合白老商業振興会など複数の地元商工会の支援、公益財団法人アイヌ民族文化財団、白老民族芸能保存会、ウイマム文化芸術実行委員会との連携など

活動の効果

長年の活動の成果が確実に実りつつあり、白老町が「芸術のまち」として周辺地域に徐々に認知されるようになってきた。また、来場者、協力者、賛同者が年々増えており、活動領域と出逢いの輪が広がり続けている。森づくりと芸術祭と共に育ってきた子どもたちが創作や表現活動を始めるなど、アートの循環も生まれ始めている。

活動の独自性

当団体の構成員と地域住民の距離が近いいため良い意味で境界が無く、アートが町に根差し始めているという感覚がある。地域住民が突然出演者として参加することもあれば、構成員が日常的に町に出没するようになりアートと町があまり分離していない。また、飛生地区では森づくり活動や常設展示の影響でアートが土地とともに年月を重ねており、場の成熟度が年々増している。

総括

2018年度は台風と地震の影響で中止となったため、まずは無事に終了できたことに感謝している。飛生でのイベントは来場者も出演者も2年ぶりとなり、そこにいる全員が喜びに満ちていた。町内連携では、芸術文化を介して当団体と町の商店街や周辺地域との結びつきが強くなりつつある。羊屋白玉が空き住宅で滞在制作を実施し、会場としてスーパーや金物店、公共施設や空き店舗等を活用したイベントを企画するなど、かつてないほど地域との協力体制が整ってきたのを感じた。同時に地域住民自身が当事者となり、企画・運営に参加する形が増えて来ており、今後も芸術文化を通じたコミュニケーション促進や、多様な人々との協働の場を作っていきたい。

Photo: Asako Yoshikawa

Photo: yixtape



トビウ小7年2組萩野篇 サウンドピクニックの様子



小助川 裕康の作品で遊ぶ子供たち



TOBIU CAMPのYoshinori Kikuzawaのパフォーマンス

活動の目的

空洞化が進む中心市街地に体験型アート作品を制作・設置することで、地元住民と観光客の交流推進や街づくりへの参加を促し、地域の賑わい創出につなげる。この制作プロセスを、アーティストと地域住民がマネジメントしながら、アートによる地域振興を担う人材を発掘・育成し、山形ビエンナーレを通して全国に発信する。

活動の内容

トラフ建築設計事務所の監修により、山形市中心市街地の解体跡地等や空きビル内に、オリジナルのスポーツ競技のためのフィールドをつくり、市民参加ワークショップで競技のルールや器具を決定・制作。地方都市における東京オリンピック 2020 年のプレイベントとして、アート+スポーツによる「ローカル競技・山カップ」を山形から提案した。

また、詩人の和合亮一さんと山形市街をめぐり、歴史的建造物、公園のベンチ、喫茶店、街路樹の下、お寺の石段など、さまざまな場所で詩を書く「ライト・オンザ・スポット」のレッスンを通し、各々が綴った詩片を箱型の本「詩ノ箱」に入れて設置し、未知の読者へと手渡し、詩作の旅へと誘う言葉の実験を行った。

参加作家、参加人数

【山カップ】鈴野浩一+禰真哉（トラフ建築設計事務所）、小坂橋基希（アカオニ）、宮本武典（プログラムディレクター）／講座参加者 14 名／イベント参加者 47 名／展示会来場者 1,061 名

【詩ノ箱】和合亮一（詩人）、宮本武典／ワークショップ参加者 31 名／イベント参加者 58 名／展示会来場者 13,270（参考値：県立図書館来場者）

他機関との連携状況

【山カップ】リノベーション物件の会場連携として、株式会社マルアール（とんがりビル）と株式会社旅籠町開発（gura）

【詩ノ箱】会場と企画連携として、山形県教育委員会と山形県立図書館。紙面連携として山形新聞社。

活動の効果

【山カップ】通常はそれぞれのコンテンツが独立した店舗として運営している施設を、ひとつのテーマで一体的に運営することで、来場者に通常とは違う風景・環境・質感の変化を提供できた（会場提供者コメント）。

【詩ノ箱】リニューアルに合わせて実施した「朗読会」では、開館時間中の静かなイメージとは異なる清々しい声が館内に響きわたり、図書館の持つ新たな魅力・価値を発掘することができた（山形県立図書館長コメント）。

活動の独自性

本事業では、美術館や劇場などのインフラに頼らず、足元の地域から多様な要望や課題に対応して、幅広くアートやデザインを利活用ができる人材が必要となっており、リサーチ、ファシリテート、場の経営能力もその職能に付与し、地方都市で活躍できるアートマネジメント人材の育成を目指すことが大きな特徴と言える。

この成果は本学が2年に一度開催している山形ビエンナーレに受け継がれ、多くの観覧者に対してコンテンツとして提供されることから、地域における活動人口と交流人口の増加を同時に図ることができることも、本事業の独自性を表すものである。

総括

人材育成の面では、すべての受講者が「各自が設定した目標を達成できた」と回答、96%が「参加することにより新たな発見・学びがあった」と評価しており、満足度はかなり高いものであった。また、「山形ビエンナーレ以外のまちづくり活動にも参加したい」との回答が70%以上あった。さらに、成果発表の場であるイベントの参加者も、93%が「期待以上の内容だった」、86%が「参加により新たな発見・学びがあった」と答えていることから、活動人口・交流人口増加の両面で一定の成果が得られたといえる。

一方で、連携先であるリノベーション物件オーナーからは、それぞれ目的が独立した店舗からなる複合施設を、同一テーマの下で一体的に運営することにより、街の新しい風景を生み出すことができたとの声が寄せられた。また、県立図書館のリニューアルオープンに合わせて実施したプログラムでも、図書館の概念を打ち破る画期的な発想の企画や、新しく整備されたオープンスペースのユニークな展示方法など、今後の運営の参考になる新たな魅力や価値を発掘してもらったという管理者からの声もあり、民間・公共いずれの施設からも今後の展開につながる高い評価が得られたと考えられる。



山形にちなんだ3種競技大会「山カップ」



街を歩きながら詩作するワークショップ



成果発表展示と座談会で活動を振り返る

団体名
実施場所さどの島銀河芸術祭実行委員会
新潟県 佐渡島代表者名
実施期間吉田盛之
2019年4月1日～2020年3月31日

活動の目的

2021年の本祭開催を見据え、地域の人々との交流を促進し、プロジェクトの理解を浸透させ、地域の民俗・文化資源を発掘する目的でリサーチを行う。またアーティスト・イン・レジデンスを行うことで展示の拡張を目指し、イベントやツアー・シンポジウムなど多角的なアプローチで独自の国際芸術祭に育てるのが目的。

活動の内容

「さどの島銀河芸術祭 2021」開催へ向けたプロジェクトを実施した。

- (1) リサーチ・プロジェクト：佐渡島内に多く残る民話や民俗文化、佐渡ジオパーク、ジアス（GIAHS：世界農業遺産）等を大学関係機関等と協働で芸術の視点で研究リサーチした。
- (2) 作品制作プロジェクト：国内外からアーティストを招聘し、当芸術祭のシンボルとなる作品を地域住民と協働で制作した。
- (3) 展示プロジェクト：インタラクティブ性を持ち、リアルな映像で宇宙を体感できるアートプラネタリウムや加茂湖の船小屋に作品を展示。
- (4) アール・ブリュット展：全国障害者芸術・文化祭にいがた大会とタイアップし、障がいのある方と健常者とのより良い共生社会の推進を図った。
- (5) 市民プロジェクト：パフォーマンスアートの新作の披露を目指し、インバウンドや訪れる人の増加を図った。
- (6) 大学連携プロジェクト：東京学芸大学等と連携し、リサーチ・作品制作・展示を行なった。
- (7) 佐渡アート・ツアープロジェクト：「もうひとつの佐渡観光」と題し、佐渡島内に多く残る民話や民俗文化、佐渡ジオパーク、ジアス（GIAHS：世界農業遺産）等を芸術の視点で巡るツアー。
- (8) シンポジウム・講演会：美術批評家や参加作家、実行委員会によって、佐渡の民俗学を芸術的視点から地域住民や市民と一緒に学び考え、今後の芸術祭のあり方について探った。

参加作家、参加人数

参加作家：イーサン・エステス（米国）、テリー・ライリー（米国）、宇佐美雅浩（日本）、ホンマタカシ（日本）等
シンポジウム：美術評論家の榎木野衣氏、現代美術家の宇川直宏氏、実行委員会メンバーや多くの市民等が参加
アートツアー：多くの島内外の人々や東京学芸大等の大学との連携により、大学生等様々な人々が参加。期間中は、約5,000人の参加者、来場者で盛り上がった。

他機関との連携状況

佐渡市、アースセレブレーション実行委員会、一般社団法人 佐渡観光交流機構、新潟交通佐渡 株式会社（バス会社）、宿泊業者、両津商工会、多摩美術大学芸術人類学研究所等

活動の効果

作家や地域住民との協働による制作、地域住民とのトークセッション、シンポジウム等で交流人口の拡大が図られたとともに、佐渡島全体の文化力向上の効果があった。自然、民俗の伝承、伝統芸能、生活芸術等を、現代芸術の表現を通じて、次代へ継承する足掛かりとなった他、次年度のプロジェクトへ繋がる活動となった。

活動の独自性

行政主導の芸術祭が多くある中、市民発動の芸術祭。規模はまだ大きくはないが、佐渡島の自然・歴史・伝承・風土は独特なものがあり、島と作家、作家と島民のマッチングを重視し、土地や地域に根ざした作品テーマ、制作展示とリサーチで歴史につらなる佐渡島や世界の今を反映し、世界や未来に繋ぐことを企図し、アートの手法により普遍的な価値・創造を試みる。

総括

佐渡島をアートの視点でリサーチした蓄積をもとに、本年度、はじめて開催したアートツアー「もう一つの佐渡観光」には、公募応募を予定している作家をはじめ、島内外から様々な人々が参加し、佐渡における民俗学や芸術人類学、芸術祭について研究と交流を深め、好評を得た。また、作品制作やアートツアーの開発を通して、地域の人々との結びつきがさらに強まり、活力を得た。本年度から東京学芸大学、東海大学、立教大学等との大学連携による活動・プロジェクトを開始し、地域との繋がりをさらに深め芸術祭に関心を持ってもらえた。他機関との連携もさらに強く結びつき、2021年の本祭開催に向けて足がかりとなる事業となった。参加作家のひとりである、テリー・ライリー（米国）のドキュメンタリームービーを制作し、そのインタビューの内容は「さどの島銀河芸術祭」の指針となる内容となった。今年度のプロジェクトの取り組みによって生み出された新たな流れを、継続していくことは勿論、拡張していくことが重要だ。



アート・ツアー「もう一つの佐渡観光」の様子



イーサン・エステスによる新作展示「Enso / Lifecycle」



シンポジウムの様子

活動の目的

「記憶と記録」釜ヶ崎が大きく変化している。高齢化によって日雇い労働者のまち寄せ場が消える。ひとりひとりの人生の記憶と記録を表現として立ち上げる。地域の野宿生活体験者や元日雇い労働者とともに多世代、多様な人々がであい、表現し合う場をつくる。

活動の内容

「釜ヶ崎芸術大学という場と他者の交流空間の創出」地域内を講座の会場とすることで、地域外から訪れる人に、まちと出会う機会をつくる。地域内の人については、他者と出会い交流する空間をていねいに作る。法人の喫茶事業や地域との関わりをいかし、日常と釜芸の表現の場をつないでいる。

2019年度は「井戸掘り」に挑戦し、地域の元日雇い労働者と多世代、多様な人々がともに活動し、生きる源の水についても思いを馳せ、アートの領域を拡げた。

参加作家、参加人数

倉田めば（ピア・ドラッグ・カウンセラー）、西川勝（哲学）、高木智志（人生俳句）、蓮岡修（井戸掘り）、水野阿修羅（地域史研究家）、宮浦宜子（食文化実践家）、中川眞（音楽学者）、前川紘士（美術家）、尾久土正己（天文学者）、ソケリッサ（ホームレスダンスチーム）、オーケストラ・アミーキティアほか

講座数：120 参加者数：1,807 人

活動の効果

「井戸掘り」のインパクトは大きく、その理由を話すと、釜ヶ崎の背景と釜芸の意義への理解が進んだ。

地域外からの視察や見学、取材が増えた。

釜ヶ崎の地域内でも「井戸掘り」に関心をもつ人が多く、見学者が増えた。土木経験をもつスタッフとともに活動することで、組織としてのチームワークが向上した。

活動の独自性

日本の高度経済成長を支えた日雇い労働者の街で活動していることが、独自性である。その街の変わり目に立ち会うときに、アート NPO としての態度を崩さず、聞き、応答するという取り組みを続けるなかで、彼らを先生とする「井戸掘り」に取り組んだ。それも、長年の地域との信頼関係でもあり、継続とアイデア、実践することの大切さを表現した。

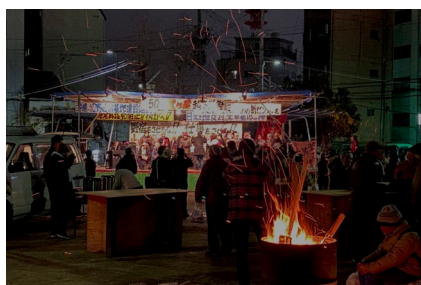
総括

ペシャワール会の中村氏が銃撃によって亡くなられた。途方もなく悲しく悔やまれる。今回の釜芸での「井戸掘り」は彼の活動の延長にある。

そこから考えると、人がどう生きるのか、一回限りの人生とは何か、を考える。人は出会いとかかわりのなかで人生の意味を変えてゆく。「井戸掘り」の活動を通して、何人かの人の人生の意味が変わってゆく姿を垣間見た。日雇い、野宿生活は世間から見下されがちだが、知恵や技術が宿ることを本人でさえ気づいていなかったことが表された。釜芸の本来の目的が達成され、そして、そこからまた取り組みたいアイデアが広がり、若い世代に伝えられたことを成果としたい。



「井戸掘り」107回、705名。スコップで4.5mの深さまで



釜ヶ崎越冬闘争での「合唱」。会場は三角公園



大晦日の「詩」一年をふりかえる

団体名
実施場所新長田アートコモンズ実行委員会
兵庫県 神戸市長田区南部、兵庫区南部代表者名
実施期間正岡健二
2019年10月12日～11月10日

活動の目的

阪神淡路大震災から20年経った2015年から始動した「下町芸術祭」は、歴史的にも移民が多く文化的多様性を持っていること、震災という共通体験を得ていることなどを活かし、新たなインフラを作るのではなく、文化芸術活動を媒介として町の持つ魅力を再発見し、未来に向けて次の町のビジョンを構築することを目指している。

活動の内容

下町芸術祭 2019 では、以下の全6プログラムを実施した。

- ・多角的な視点から地域の歴史や文化について考える「下町芸術大学 2019」
- ・神戸ゆかりのアーティストを招聘し、まちの変遷を作品を通して表現した「from 此処から、これから」
- ・個人宅を公演会場とし地域住民が演者として出演するなど、地域との協働が行われた「家が歌う」
- ・3カ年プロジェクトの本説として能形式を引用した現代舞台劇にて下町の概念を捉え直した「森村泰昌 下町物語 2017-2019」
- ・3名の写真家の作品を広場や商店街などの公共空間に大型展示した「下町写真」
- ・それぞれの企画を横断するプログラムとしてツアーやカフェを運営した「つなぐプログラム」

参加作家、参加人数

【約90組】あごうさとし / Erin Kilmurray / おおのあやか / 片岡杏子 / 加藤千佳 / 神野翼 / 國久真有 / 澤田知子 / 砂連尾理 / ソン・ジュンナン / 高田雄平 / 高橋信夫 / 趙恵美 / 寺田みさこ / 永井順 / 中元俊介 / パクウォン / ハラチグサ / 薔薇の性 / 広瀬浩二郎 / 藤森太樹 / 松見拓也 / 馬淵洋 / 宮崎みよし / 森村泰昌、他

他機関との連携状況

兵庫県、神戸市、長田区などの地元自治体と連携。地域の25以上の団体が実行委員会に参画しており、資金援助だけでなく広報面でも協力いただき実施した。

活動の効果

「下町芸術祭 2019」では、駅近くの広場や商店街など、地域住民の日常の動線内に作品を展示したことによって、30日間の会期で延べ147,125人に芸術作品の鑑賞機会を提供することができた。また、来場者やスタッフ、アーティストが気軽に立ち寄れるプラットフォームとしてカフェ運営をしたことにより、カフェのスタッフや利用者から自発的にイベントが立ち上がるなど、双方向なコミュニケーションが生まれる場となった。

活動の独自性

下町芸術祭は、当エリアで活動しているアート団体を中心に、地域内のさまざまな企業が実行委員会に参画し、アートを媒介に地域内の人や団体がつながるハブとして実施。ただ作品鑑賞提供を目的としているのではなく、下町情緒が色濃く残る路地や古民家に足を踏み入れていただくことで、地域内外の人がアートと共に第三者的に街が持つ魅力に気づき、場のものを深く体験していただけるようにプログラムを展開している。

総括

当実行委員会では、2015年より2年に1度芸術祭を実施しており、3回目となる「下町芸術祭 2019」は、それぞれの分野にて専門性の高いディレクターに企画を委嘱したことにより、特色豊かで先進的な企画でありつつ、「下町」という地域性が立ち上がる全体として非常にバランスの良い構成であったと自負している。

本年は、地域住民から自発的に企画が立ち上がるなど、これまで培ってきた関係性の上でこそ成り立つプログラムが展開され、継続的な活動の重要性が浮き彫りになるとともに、下町芸術祭としてのアイデンティティが垣間見える取り組みとなったように思う。その一方、ボランティアスタッフの不足や恒常的な事務局の不在など、運営体制においてさまざまな課題も浮き彫りとなった。今年度は、実行委員会体制を見直し、企画内容に関わる実行委員は企画部会として委員会体制から分離するなどの大きな変更を行った。また、当エリアに合同庁舎が移転するなど、町自体も転換期となった。阪神・淡路大震災からの復興だけでなく前進する町の日常に、アートや文化が当たり前のように溶け込む日が来ることを願って、今後も様々な活動を模索していきたいと考えている。



展示プログラム「from 此処から、これから」



パフォーマンス・プログラム「家が歌う」



写真展示プログラム「下町写真」

団体名
実施場所

クシノテラス
広島県 県内全域

代表者名
実施期間

櫛野展正
2019年6月22日～12月1日

活動の目的

高齢者による創作物をはじめ、「かかし祭り」などの伝統行事、地元企業による創作和菓子など、地域には美術館に負けない文化資源がたくさん存在している。そこで本事業を実施することにより、地域住民の生活のなかにこそ「表現」が存在していることを多くの人々が共有し、地域の活性化が促進されることを目的とする。

活動の内容

当該地域の備後圏域は、穏やかな瀬戸内海を望む南部（広島県福山市・三原市・尾道市・岡山県笠岡市）と背後に雄大な中国山地がそびえる中・北部（広島県府中市・世羅町・神石高原町・岡山県井原市）の6市2町から構成されている。タレントゲストがアテンド役となり、参加者と備後圏域で活動する表現者のアトリエや自宅、そして地域の魅力的なスポットや奇祭を巡るツアー「びんごトリップトラベル」を開催した。

第1回 びんごトリップトラベル 2019年6月22日（土）開催

参加ゲスト：井上咲楽

第2回 びんごトリップトラベル 2019年10月5日（土）開催

参加ゲスト：片桐仁

第3回 びんごトリップトラベル 2019年12月1日（日）開催

参加ゲスト：今立進（エレキコミック）、七瀬力オリ

参加作家、参加人数

第1回：参加者18名／虎屋本舗、こめどこ食堂（昼食）、

小川卓一、山名勝己

第2回：参加者24名／阿伏兎観音、zono kitchen（昼食）、

スギノイチヲ、貝と珊瑚の館、スナックジルバ

第3回：参加者24名／東村町かかし祭り、中国料理 蓮華（昼食）、

喫茶「伴天連」、スナックジルバ

他機関との連携状況

旅行会社（富士急トラベル）と連携し、ツアーを企画開催した。地元の経済情報誌やタウン誌での取材をはじめ、訪問先の飲食店などの協力を仰ぎ、ツアーを開催することができた。

活動の効果

芸能関係のゲストを迎えたことにより、SNSやラジオなどを通じて広く活動を周知することができた。その影響により、近隣県だけではなく、九州や関西、中部、東北、関東地方など幅広い地域から参加者が集い、それまでアートや備後圏域に興味のなかった人たちが、ツアーを通じて、地域の活動や表現を知って頂く契機になった。また、地域で人知れず表現活動を続ける人たちにとっては、自身の活動や存在をアピールする場となった。

活動の独自性

本ツアーの見どころは、美術館や画廊などではなかなか実感できない表現者たちの表現が生まれる生々しい現場を、「珍スポット」「B級スポット」として蔑視するのではなく、わたしたちが敬意を持って訪問することにある。特に、市井の表現者の自宅を個人が訪問するには、本来難しいことが多い。しかし、そうした場を訪問することは、美術館に陳列された作品を儀礼的に鑑賞するのではない、通常とは異なる新しい美術の見方を世の中に提示することにも繋がっている。さらに、そこでひとりひとりが、ゲストや参加者、そして表現者と対話を重ねることで、周縁で生まれる価値について深く洞察する機会にもなっている。

総括

これまで「現場訪問ツアー」と題したツアーを全国で開催してきたが、初めて年間を通じて、「びんごトリップトラベル」という備後圏域の表現者や場所を巡るツアーを開催した。未だ評価の定まっていない作り手の表現に興味関心を持っているゲストを外から招聘したことで、改めて地元を批評的な視点で見つめ直すことができ、さらにゲストと表現者のやり取りも面白い化学反応を生み、これまでにない魅力的な企画になった。アンケートにもそのことを明記する参加者が多く、そうした化学反応を楽しむために3回とも参加する方も数名いた。本ツアーを通じて、地域に眠る魅力的な人や場所の存在を再発見することができたが、それは同時に、どの地域にも素晴らしい表現者や場所が存在していることを明示している。ツアーに参加した人たちが、その後、独自にそれぞれの地域で、同様の表現者や場所を発掘・紹介するといった報告も届いており、そうした意味でも本ツアーが果たした役割は大きいと感じている。



井上咲楽さんと尾道訪問



片桐仁さんとクシノテラス訪問



今立進さんとスナックジルバ訪問

活動の目的

百島で 40 年近く空き家となっていた民家をアーティストのディレクションで改修し、刺激的な美術作品と共に来訪者が滞在できる宿泊施設に再生するプロジェクト。島内に多く残る廃屋を活用して ART BASE 百島が実施する「アートハウス・プロジェクト」の第 2 弾となる。

活動の内容

2017 年 2 月に島民と協働で改修工事を開始し、2017 年、2018 年秋に開催した企画展では作品展示会場として一時的に公開した。2019 年にはゲストハウスとしての完成目前のお披露目として、1 階母屋で榎忠が機関銃と大砲、葉菜作品の重厚感のあるインスタレーション「L.S.D.F」を常設展示。2 階寝室では池内美絵による自身の身体から生み出された素材を用いたデリケートでフェティッシュな作品群を企画展示した。柳幸典は百島の民家で発見された江戸時代の日本刀に憲法 9 条の条文を彫刻した「籠の鳥」を 2018 年より継続展示。

また、地元学生の協力を得て制作した特大五右衛門風呂も完成し、来場者数組限定で体験入浴を実施した。

参加作家、参加人数

参加作家：榎忠、池内美絵、柳幸典

参加人数：学生ボランティア 20 人、来場者 950 人、地域住民の皆さん

他機関との連携状況

数年前より海外からの団体客を積極的に受け入れており、Japan Travel Company が企画する「Inland Sea Odyssey」と題した瀬戸内のアートを巡るツアーの会場となっている。

活動の効果

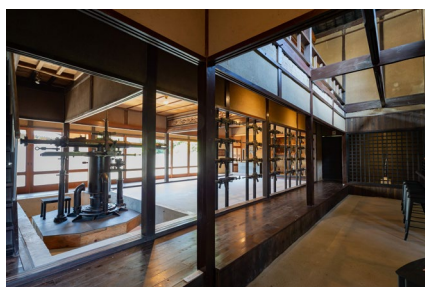
島内に作品の展示場所を点在させることで来場者が徒歩で島内を巡り、作品鑑賞のみでなく離島というユニークな環境を体感しながらより充実した時間を過ごすことが可能となり、地元住民との交流も生まれた。また改修工事の大部分を移住者の職人が行い、地元住民によるランチを販売するなど、島民との協働で事業を行なった。

活動の独自性

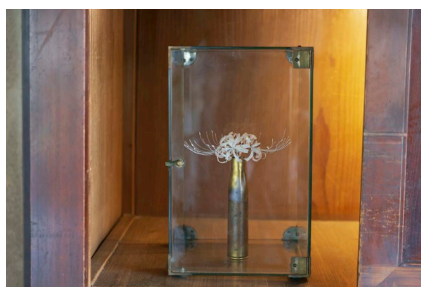
ART BASE 百島はアーティストによる企画、ディレクションで運営している。「アートハウス・プロジェクト」では百島の大きな課題となっている空き家を芸術で再生し、展示作家は通常の美術館やギャラリーとは異なるユニークな空間でサイトスペシフィックな新作やインスタレーションを創造する。乙 1731-GOEMON HOUSE の改修の過程では、特大五右衛門風呂の竈作りの土練りと成形の作業を、地元の美術学生を招いてワークショップ形式で行った。従来の作家による作品制作や展示に留まっていた美術館の機能を再考し、都心部の喧騒と離れた離島でアーティストによるコミュニティ創造を目指している。

総括

ART BASE 百島は 2012 年より毎年企画展を行っているが、百島には来訪者が宿泊できる施設がほぼないことが課題であり、フェリーで行き来をしなければならない離島という環境であることから来場者の滞在時間は限られていた。乙 1731-GOEMON HOUSE の完成により、日本の現代アートを賞讃な環境で味わいながら、地元住民との交流や自然を十分な時間を持つて体験することが可能となった。またアーティストにとっても従来の展示スペースとは異なった唯一無二の空間で作品を発表できる機会になり、日本家屋に刺激的な現代アートというユニークな組み合わせは特に海外からの来訪者に注目されており、瀬戸内の隠れたアートの名所として 2020 年のフルオープンが期待されている。



1 階大広間 榎忠による展示風景



建具を利用した、池内美絵の展示風景



特大五右衛門風呂

活動の目的

高見島の東斜面に位置する浦集落の景観を利用した屋外イタリアン・レストランの運営

活動の内容

瀬戸芸期間の運営のために今回新しい立地での屋外レストランの整備を行う必要が出て、こえび隊の応援、テラス自体の大工工事、厨房の設備工事が発生した。今回、厨房が小さい為、現地での仕込みが出来ない為、新しくメニューの開発、専門業者による仕込みの委託を行った。今回はオフィシャル・ツアーの受け入れも行った。

参加作家、参加人数

作品制作	野村正人、鎌田吉敬、野村俊明 寺井裕子
お花制作	楠原裕子
料理監修	西本美和
テラス工事	原組
厨房工事	森末商店

他機関との連携状況

多度津町、多度津高校の生徒、瀬戸内こえびネットワーク、琴バスと連携して事業を行った。

活動の効果

今回はほとんどの製作をこえび隊（瀬戸内こえびネットワーク）の協力に基づいて実行した。海外からの参加者も多く、交流が進んだと考えている。また、オフィシャル・ツアーの受け入れで参加者同士の交流も生まれたと考えている。

活動の独自性

高見島という過疎の島で買い物、食事の場所の無い中、島のオアシス的な場所を生み出せたと考えている。

総括

オフィシャル・ツアーは予想以上の予約が有り、少し受け入れを増加した。参加した方々からは好評の意見が多かった。キャンセル待ちの方々も多く、今後の計画の上で期待できる計画だと思う。



こえび隊によるテラスのテーブル塗装風景



西本美和さんの指導の下、料理指導風景



テラスにて料理試食風景

団体名 特定非営利活動法人 BaRaKa
実施場所 長崎県 新上五島町、五島市

代表者名 片岡 優子
実施期間 2019年10月1日～11月30日

活動の目的

文化・芸術活動を通して多様な人々が境界を越えて交流し、島の内包する力や隠れた人材・宝物に気づき島に暮らす幸運を共有し、地域社会が経済に優先して精神的豊穡を得ることを目的とする。

活動の内容

10月24日 Hakase-sun ライブ（政彦神社）
10月27日 Hakase-sun ライブ（はまぐりデッキ）
10月26日 映画「盆唄」上映会&岩根愛トークライブ（新上五島町鯨賓館ホール）
10月27日 映画「盆唄」上映会&岩根愛トークライブ（五島高等学校モリアルホール）
11月1日 向井山朋子 上五島高等学校講演
11月3日 シンポジウム「五島神楽の継承と未来」
11月4日 向井山朋子ピアノコンサート
「人生を変えてしまうメロディー」

参加作家、参加人数

Hakase-sun ライブ（政彦神社）約100名
Hakase-sun ライブ（はまぐりデッキ）約50名
「盆唄」上映会&岩根愛トークライブ（新上五島町鯨賓館ホール）約20名
向井山朋子 上五島高等学校講演 約40名
五島神楽シンポジウム 約30名
向井山朋子コンサート 約250名

他機関との連携状況

新上五島町役場、上五島神楽保存会、有川神楽保存会、政彦神社、長崎県立上五島高等学校、上五島ガイドの会、はまぐりデッキ

活動の効果

新上五島町では秋の例大祭が2カ月にわたって毎週末のように行われている。2カ月の神楽奉納スケジュールを作成したことを神社関連、行政中心にとっても喜んでいただいた。国際的ピアニスト・向井山朋子氏のコンサートでは、子どもたちやお年寄り、高校生などが普段接する機会のない音楽に接することで、初めは戸惑っていたが、最終的には感動していた。体験してもらう機会を作ることが文化芸術の重要性の理解に繋がると感じた。

活動の独自性

新上五島町では2カ月間にわたって五島神楽が奉納され、約55回2時間弱の神楽奉納という舞台（餅まきのお土産付き）が開催される。

総括

今回から活動拠点を五島市から新上五島町に移し、新上五島町を中心に芸術祭を開催した。伝統ある神楽と尖った文化芸術活動を融合させるコンセプトが明確になった。そして神楽が奉納されている地域は老若男女が自ら盛り上がっていて、人口が減っていないようだ。これは特筆すべきことだと思った。五島市では旧盆の時期に念仏踊りが11地区奉納され、正月には特徴のある獅子舞が三井楽地区で奉納されている。伝統芸能を軸に芸術活動を融合して、最終的には五島列島全体をつなぐ芸術祭となることを目標に継続していきたい。



11月3日 シンポジウム



11月4日 向井山朋子ピアノコンサート

公益財団法人 福武財団

地域振興助成

2019年度 瀬戸内海地域振興助成
成果報告書

団体名
実施場所一般社団法人 小豆島サイクルツーリズム推進協会
香川県 小豆郡

代表者名

須藤 渚

活動の目的

サイクルツーリズムが始まったばかりの小豆島において、学びの場を設けることを目的とした。

- 1 つ目は、サイクルツーリズムや地域振興の専門家による講演会を開催。
- 2 つ目は安全性を高め、サイクリングガイドの知識を得るため、島内のサイクリスト向けの講習を行うこと。
- 3 つ目は、小豆島サイクルツーリズム推進協会のメンバーがサイクルツーリズム先進地域へ実際に出向き、現場を学ぶこと。

活動の経過

2019 年 4 月に、北海道サイクルツーリズム推進協会代表理事である高橋氏を北海道から小豆島に招き、安全講習を実施。島内のサイクリング愛好家約 10 名が参加した。座学ではチーム走行のルールやハンドサイン等を学び、実習では実際に小豆島でチーム走行をしながらガイドの練習も行った。

5 月には、サイクリングイベントの前日イベントとして、講習会を開催。講習会は国土交通省ナショナルサイクルルート認定制度委員でもある高橋氏による「日本のサイクルツーリズムについて」、リバースプロジェクトトレーディング代表取締役である河合氏による「地域商社からみたサイクリング」をテーマに講演をいただいた。島内外から 30 名が参加し、講習会後には交流会を行い、参加者同士の交流の場を持つこともできた。また、岡山県の 8 つのサイクリングルートの 1 つである「片鉄ロマン街道」に視察に出向き、サイクリングルートマップ、備前市サイクリングターミナルでの自転車貸出の様子、道路標識等を実際に見学することができた。

活動の成果

安全講習は、座学とサイクリング実地トレーニングの両方を行った。座学では、自転車道交法、ハンドサイン、ガイドングについて、事例を交えながら学び、セーフティトークのロールプレイ等も行い参加者同士、理解度を確認し合った。実地トレーニングでは、まず広場でチーム走行、細かい蛇行を練習し、次に、実際の道路に出てチーム走行を実施。先頭のリーダーは、後続の人たちに進行方向、ブレーキのタイミング、障害物をハンドサインと声両方で伝える。また、後方からも、後ろから来る車の情報やスピード調整等、コミュニケーションを図る。実習後には、実際に走って気づいたこと、難しかった場面を共有し、ルールを復習した。参加者からは、走行ルールの疑問が解消された、同じ自転車愛好家と意見交換できる良い機会となった等、沢山のポジティブなフィードバックを得ることができた。

講習会では、講師が実際に他地域で携わっているサイクリングツーリズムの PR 動画「Japan Cycling Golden Route」を視聴したり、意見交換を行ったりして、サイクリングと地域事業の繋がり大切さを学んだ。参加者に島外の方も多かったことや、行政、サイクリング事業者等、様々なバックグラウンドの方との意見交換を行うことができた。

視察を行った岡山県の片鉄ロマン街道では、サイクリング専用ロードが整備されており、道路標識等が分かりやすかっただけでなく、自転車レンタルの場所でももらえるサイクリングマップには、観光地や休憩ポイントの楽しさが分かりやすく書かれており、サイクリストにとって有難いサービスを沢山見ることができた。

以上、様々な角度からサイクルツーリズムを学ぶことができた。

今後の課題

様々な方向から、サイクルツーリズムについて学ぶことができた。これらのうち、小豆島でも実現できること、立地や安全等の観点からできないことを判断し、良い所を地域に合った形で取り入れていくことが必要だと感じた。



安全講習会での走行練習



サイクリング講演会



片鉄ロマン街道視察

団体名
実施場所塩屋青年会
兵庫県 神戸市垂水区

代表者名

岸部克俊

活動の目的

塩屋の郷土芸能である布団太鼓は昭和 30 年代に一度廃絶したが平成 21 年に約 50 年ぶりに復活。復活してこの 10 年、青年会を中心に活動を進めてきた。10 年の間に、ハード面として布団太鼓の改修、布団太鼓倉の建築、ソフト面として担ぎ手の技能向上、布団太鼓巡業の運営ノウハウ向上など、地域の各団体のご協力により成長することができた。今では、布団太鼓巡業は老若男女が集う世代交流の場となる行事となった。町の宝である布団太鼓を二度と廃絶することなく後世に引き継ぐため、地域の多くの若い世代（子供たち）にこの布団太鼓を知ってもらい乗子（太鼓叩き）や将来の担ぎ手の継承につなげたい。

活動の経過

2018 年 10 月 秋祭りの布団太鼓巡業の子供巡行に地域小学校と P T A 関係者に実際に見て体験して頂きこの活動の趣旨を理解して頂いた。

同年 12 月 塩屋青年会役員会にて、布団太鼓の継承について議論し、乗子衣装および子供用法被の製作を提案。

2019 年 3 月 乗子衣装と子供用法被の発注

同年 5 月 1 日 天皇陛下ご即位奉祝垂水布団太鼓巡行実施。初めて垂水の街で塩屋の布団太鼓を披露することができ、垂水区民の皆様にも塩屋地区の布団太鼓をアピールすることができた。

同年 5 月 地域のお祭（神戸まつり協賛しおやまつり）にて、地元小学校で伝統芸能の獅子舞公演と乗子の募集を開始。

同年 7 月 地域の夏祭り（若宮神社天神祭）にて太鼓倉を開放して布団太鼓の公開。秋祭り以外で布団太鼓に触れる機会をつくり多くの子供たちに体験してもらえた。

同年 9 月 秋祭りに向けて乗子の練習開始とともに体験会を実施。地域の小学校と幼稚園に子供巡行の案内の配布。子供法被と乗子衣装納品完了。

同年 10 月 海神社秋祭り塩屋布団太鼓子供巡行の実施。

活動の成果

昨年、令和元年度（2019 年）海神社秋祭り塩屋布団太鼓子供巡行は、下記の成果を得る事ができた。

子供の参加数は、当初 170 名参加を見越していたが、事前に地域小学校と幼稚園に参加の案内の配布を行った事により 250 名以上の参加があり、大いに子供巡行が盛り上がった。また子供巡行の案内配布を行ったことにより新興住宅地内での巡行では、多くの親子が詰めかけて、来年は子供巡行に参加したいといった声や、将来乗子になりたいという声、布団太鼓巡行に対する意見や提案など頂き、来年以降の活動にフィードバックしていきたい。

当初子供用の法被は、子供巡行に参加する子供たちにと考えていたが、製作枚数や管理の問題など青年会で意見を出し合い、乗子が子供たちの憧れの存在になれるよう乗子が着用して、乗子自身で祭期間中管理して運用することとした。

また新調した乗子衣装は、乗子たちに変大好評であると共に自分達の大切な“道具”の一つとして、乗子たちのモチベーションの向上が図れ、新たな価値を見出した。

今年は青年会の活動の場において、布団太鼓を次世代に継承することを念頭に、太鼓叩きの体験会等の実施により新たに 4 人の乗子が誕生した。何よりも今年から昨年まで乗子であった 6 人が担ぎ手となり布団太鼓が復活して、10 年目にして初めて一つの道を開くことができた。布団太鼓を引っ張る子供巡行から乗子、担ぎ手、太鼓長、各役員となりこれからの世代が塩屋の布団太鼓を継承できる環境を引き続き整えて活動していきたいと思う。

今後の課題

公道を使用している子供巡行は、参加人数が増えることにより子供たちと親御さんの安全確保が必須課題であり、協議会（村）、警察と連携して対策を講じる。親御さんから乗子の安全面（太鼓に乗っている時）についてご指摘があった。他地区の布団太鼓を参考に今後は、祭り全体の安全面を強化する必要がある。



塩屋布団太鼓子供巡行の様子



新しく街開きした住宅地での布団太鼓巡行と獅子舞公演



子供法被と今年の乗子たち

活動の目的

三原市には、お祭りの一つとして神門市（通称だるま市）がある。毎年2月に神門市は開催され、巨大なだるまが路上に設置される等、地域のにぎわいを創出している。RoFReCは、プログラミング教育事業を行っているが、本プロジェクトでは、地域の特色であるだるまを生かしたプログラミング教材の開発を行った。プログラミング教育とだるまのかけ合わせによって、教育と地域の振興に寄与することを活動の目的としている。

活動の経過

活動の経過は、4つの段階にわけられる。

- ①三原だるまプログラミング教育のかけ合わせ方についての研究
- ②教材開発
- ③親子向けのワークショップの企画と開催
- ④地域内外へのPR活動、神門市等での展示

三原だるまプログラミング教育をかけ合わせた教材開発を進めるにあたり、三原だるま職人やデザイナーやプログラミング教育のメンターらとの連携を行い、定期的に打ち合わせを実施した。

どのようなかけ合わせにより三原だるまの特色を生かすことができるのか、また、地域の人たちが子どもたちに愛される教材となるのか、先進事例等の研究を推し進めた。MAKE！REMAKE！ミハラダルマの基本コンセプトを確立させ、また、それを教材開発へ落とし込む作業を行った。

試作は複数回に及ぶが、2019年度版の教材を用いて親子向けのワークショップを全二回開催した。ワークショップによって制作されたミハラダルマを、三原のお祭りである神門市にて展示出展を行った。また、地域外でのプログラミング教育関連のシンポジウム等で、積極的にプロジェクトのPR活動を行った。

活動の成果

- ・親子向けのワークショップは、2019年9月および11月に開催した。いずれも満員御礼となった。内容は、三原だるまの七転び八起きの特徴を活かし、だるま内に内蔵された加速度センサーが反応することで、三原だるまの特徴であるハチマキが点灯する仕様のプログラミングである。アンケート結果では、子どもたちの95%が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答し、保護者の100%が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した。
- ・ワークショップの様子が、三原テレビ放送によって放送された。また、中国新聞（10月9日付）へも掲載された。2020年度よりスタートする小学校でのプログラミング教育について触れられ、「IT技術の習得と郷土文化への親しみにつなげる」取り組みとして紹介された。記事内では、三原市教育委員会学校教育課 課長の「民間の取り組みと知識を共有し、（学校現場へのプログラミング教育の）スムーズな導入を目指す」とのコメントも寄せられた。
- ・MAKE！REMAKE！ミハラダルマのロゴが、第11回広島アートディレクターズクラブ公開審査会において、審査員特別賞（高田唯賞）を受賞した。
- ・教育イベントや、プログラミング教育関連のシンポジウム等でプロジェクトの紹介を行った。地域の多くの親子の関心を集めた。また、地域外でも伝統民芸品とプログラミング教育のかけ合わせに関心を持つ方が多くおられ、プレゼンテーションの機会をいただいた。また、ユーチューブでもワークショップの様子の動画配信を行っている。
- ・神門市での展示出展を行った。お祭りの実行委員会の方々やお祭りの参加者に取り組みを知っていただいたことは大変意義深かった。2021年の神門市でも展示を打診いただくなど、プログラミングという新たな角度から三原だるまを見直す取り組みは反響をよんだ。

今後の課題

2019年度の活動を通して、三原だるまプログラミング教育のかけ合わせは、地域内外に関心をひくことがわかった。活動を広めていくため、より多くの親子にミハラダルマ教材を体験していただきたいと考えている。課題は、教材の販売価格が高くなっていることであり、今後は、教材としての魅力と価格のバランスをとるべく開発を進める。



三原だるま職人とプログラミング教材の開発



親子を対象とするワークショップを開催



神門市でブース出展

活動の目的

坂出市の島嶼部、櫃石島、与島、岩黒島などは、かつて幕府の御用水主として水運業などで栄えた地域ではあるが、近年は著しい人口減少による過疎化により、学校も廃校となりはじめ地域の伝統行事でさえも守ることが難しくなってきた。

聞き取り調査や小規模の伝統行事を中心に記録し、資料の収集や調査を行い、誇りある地域の歴史・民俗を記録し語り継ぎ、地域の活性化や島を紹介する資料とすることが活動の目的である。

活動の経過

4月からスタートダッシュし、活動途中に於いて福武財団より活動方針についての助言もいただき有意義な活動を行った。

活動は、調査地域を中心に喫緊の課題である聞き取り調査を1年を通じて各島で、多くの録音、文字起こしを行った。

8月には、失われつつある民俗について、大きな行事より小さな行事の方が簡略化・廃止になりやすいことから、盆踊りの後の盆行事を中心に現地調査を行った。また、藤原純友が築いたと伝わる鳴瀬の暗礁の現地調査は、よく潮が引く1月に行った。あまり知られていない寺社の調査では、ドローンを使って方位を守護する四神の調査を行った。古地図についても虫食いで開いてみるものが出来なかったものを補修して調査や報告に活用することが出来た。

瀬戸大橋架橋前の比較的新しいものについての調査では、これも30年たっており、すでに歴史であることから、新聞記事や聞き取り調査から当時の島しょ部の暮らしを調べた。

活動の成果

いくつかの活動計画を立てたが一番の成果は、鳴瀬の暗礁の調査である。天慶年間の藤原純友の乱に塩飽が巻き込まれた時、櫃石島はその最前線に位置し、東側にある釜島に純友が立て籠もりその隣の松島に純友の弟が籠った。その松島と櫃石島の間に純友が築いたという伝承のある鳴瀬の暗礁。漁業者からの「あそこは捨て石だから足場が悪い。」という聞き取りを踏まえての現地調査を行い、捨てられたと思える石を見てそこに立った。また一つ小石を採取し、今後に生かせる調査だった。

古地図は開くことも出来ないものだったが、価値があるものとの確信から補修し、2月の香川大学の坂出サテライトセミナーで資料として生かすことができた。今後の研究にも生かすことが出来るものと確信した。

聞き取り調査は年度を通じて主に高齢者より行い、無くなる伝承や伝えられていた島の歴史を録音して文字起こしした貴重な資料となった。船霊（フナダマ）さんや「よどのぼん」は、もう消えていると言ってもいいものであるような価値ある調査と思える。

小さな行事は簡略化、そして消滅しやすいものであることから、盆踊りのあとの岩黒島のお大師様と、観音様の盆踊りの調査、櫃石島の地藏盆の調査を行った。どれも細々とはあるが引き継がれている貴重な伝統行事であった。

瀬戸大橋の完成する前の島についての調査では、新聞記事より調べることができた。30年前の事ではあるが、古い歴史ではないにせよ記録になりにくい、島の貴重な、残さなくてはならない記録の調査であったと思う。

語り継がなくてはいけないものを掘り起こしての調査活動を行うことができた。

今後の課題

高齢化、そして知っている人がいなくなることから聞き取り調査はますます厳しくなる。また、今回調査したものやその活動から得られたヒントを生かして継続していくことが重要なことから、新しい協力者を増やし、地域の歴史を掘り起こし新たな課題を作り、調査する必要がある。そして、常に情報発信をしていき、得られたものを地域に還元していく必要がある。



藤原純友が築いたという鳴瀬の暗礁の調査。



櫃石島の地藏盆。千体流し札を流す。



盆の後の観音堂での白昼の観音様の盆踊り。

活動の目的

愛媛県芸予諸島では、他の島嶼部と同様に人口減少、高齢化とそれに伴う空き家の増加が問題となっている。本活動では、こうした空き家や空きインフラを活用のイメージが湧くところまで手入れをして公開することにより、居住を希望する方に橋渡しをすることを目指す。特に住みこなす難易度の高い古民家などの空間の潜在的な魅力を発掘し、その要素が顕在化する設えをしてその体験を共有することで、活用され、住み継がれてゆくきっかけを作り出すことが本活動の目的である。

活動の経過

本活動は、これまでの活動の中で関係を築いてきた上島町弓削島と今治市大三島で実施した。

大三島では当初、集落内にある古民家での活動を予定し、ご協力いただいている現地 NPO の方々と共に準備を進めていたが、状況の変化により当該建物での実施を見直し、ポテンシャルのありそうな島内の別の物件をご紹介いただいた。架橋前は本四航路の経由地だった宗方港の側に建つ「かわかみ旅館」は、かつて今治などから大勢が訪れて賑わったが、交通体系や需要の変化によって廃業し空き家となっている。しかし建物自体は綺麗に維持されており、目の前には入り江の海が広がる好立地であり、活動の対象とすることにした。特に、旅館前の海に浮かぶ棧橋にはこの場所の無二の魅力を感じ、ここに海面に触れることのできるほど海に近い「海上カフェ」を仮設。そこでの体験を共有して、活用に向けた可能性を探った。愛媛県上島町では、これまでの活動で実現した交流拠点「上島町ゆげ海の駅舎」を、住民と来訪者相互の交流の場として更に活用していただき、移住促進にもつなげるための活動を検討。日々、この場所を放課後の学習スペースとして活用している高校生たちにヒヤリングをして、一番希望の多かった日除けカーテン作りを進めることとなり、大学生時代に弓削島で活動に参加して以来、島に関わり続けてきた卒業生が中心となって、カーテン作りワークショップを実施した。

活動の成果

「海上カフェ」製作は、旅館の所有者に加え地元の漁協と宗方港務所の方にもご協力いただき実現した。関東および東北から大学生が来島し、傷んだ棧橋の床板を補修しながら DIY でテーブルや椅子、日除けなどを設えて仮設の海上カフェを作成。地域の方々にもお越しいただき、ここにしかない海上での開放的な過ごし方の魅力を共有した。かわかみ旅館の建物は定期的にメンテナンスがされており、一部空調やガス、給排水などの設備が使用可能だったため海上カフェ設置・運営時の基地として使うことができ、海辺の倉庫と併せて一体的に活用することの可能性が示された。次年度以降も発展的に活動を継続することを検討しており、この場所を拠点としたモニターツアーの実施を目指している。

弓削島では、学生の頃ワークショップに参加して来島した卒業生と、島の高校生たちを含む地域の方々との持続的な交流が生まれつつある。移住を検討し始めていとも聞き、交流人口だけではなく定住人口増加への緒となれば幸いである。こうした流れを活かし地域の、特に若い方々のまちづくり活動参加を促し、将来的なまちの担い手としての資質を育むことに繋げてゆきたい。

私たちはこれまで空き家活用に関する活動を、以下のような方針に基づいて実践してきた。

- 1：空き家をその場所の活用をイメージできる姿にしてみる
- 2：場所の魅力を顕在化して、その体験をみんなで共有する
- 3：「いずれこうなったら良いな」という絵を描いてみる
- 4：やれることからやってみる
- 5：持続的に活動する

弓削島の「上島町ゆげ海の駅舎」や、近年移住してきた方によって開業した「古民家 弓削の宿」は、こうした活動を通じて実現した。本年度以降も潜在的な環境や空間の魅力を顕在化する活動を通じて、みんなで空想を共有し「欲しかった場所」をつくる試みを続けてゆきたい。

今後の課題

私たちはこれまでの一連の活動で、潜在的な場所の可能性を社会実験により顕在化し、思い描く理想的な将来像を地域の方々と共に共有し、ご意見をいただきながら修正してゆく中で『みんなで空想を共有し、「欲しかった場所」をつくる』ことを目指してきた。大三島と弓削島、活動に於ける段階は異なるが、これからつくりたい場所はどんなところか、つくられた場所をどのように運営すべきか、段階に応じて持続的に考えてゆきたい。また今後、地域の方々が主体となる自立した活動へと繋げてゆきたい。



島の高校生発案によるカーテン作りWS／上島町ゆげ海の駅舎



空き家の旅館前にある浮き棧橋で「海上カフェ」の製作／大三島町宗方



仮設の「海上カフェ」で環境の魅力を共有

活動の目的

島内にある荒れ果てて使われなくなった土地（休耕地）を再生していくこと、そして、直島の新たな特産品として、いちじくを栽培し「直島いちじく」としてブランド化を目指す。日本の方だけでなく世界中からやってくる観光客へ直島いちじくを提供し、直島の新たな魅力を創造していくことを目的としている。

活動の経過

竹林になってしまった畑を竹の根っこから除去し、土地造成を行った。香川県東讃農業改良普及センターの掛鯛先生に指導していただきながら、島内にあるいちじくの木から枝をおすそ分けしてもらい、第一弾として挿し木ワークショップを開催した。第二弾は特別メンバーでもあるイエンスさんを講師に迎え、中奥いちじく園にケージを建てる「DIYワークショップ」を開催。挿し木の水やりもすぐ出来るよう水道も開通した。第三弾のワークショップは、再びイエンスさんを招き小屋の基礎を完成させた。小屋が畑の一段上にあるため、斜面に階段も全部で3箇所作った。小屋づくりに関しては、物流コストがかかり資材の搬入にも予想以上に時間がかかってしまった。作業も畝作りを優先的に行ったため計画通りに進まなかったが、無事2月に小屋が完成した。そして、中奥いちじく園、島小屋、宮浦の家などでいちじくの苗を合計約30本育てた。その中から元気に育った苗9本を選び畑に移植した。切り戻した枝はまた挿し木として増殖していく。

活動の成果

挿し木で植えたいちじくに実がなるまであと約二年かかるが、まずは目的である竹林だった休耕地をいちじく園として再生することが出来た。

いちじくの栽培に関しては、講師を迎えることで正しい栽培方法を身につけることが出来た。台風などの対策、イノシシやカミキリムシなどの害獣・害虫対策、雑草対策など学ぶことも多かったが、今年一年学んだことを参考に来年以降も継続して活動していくことができる。

また、以前はイノシシの被害が多いエリアだったが、休耕地をきれいにすることで、害獣が畑や近隣に寄り付かなくなった。活動を通じて近隣の方たちの意識も変わり、いちじくの育て方を聞かれる機会も増えた。地域の活性化や農業に対しての賑わいの創出、コミュニティの維持・向上が出来たと感じている。地域コミュニティと関わりながら活動していくことで、いちじくの魅力だけでなく地域の魅力も再発見することが出来た。

SNSでは、フェイスブックとインスタグラムにてプロジェクトのアカウントを作成し、活動の情報発信をしている。たくさんの方に関心を持ってもらったおかげで、メンバーが増えたり、グッズの販売に至ったり、今後の展開にも繋がっている。今後もこのプロジェクトを通して地域に貢献していく。

今後の課題

イノシシ問題：毎年増加し、畑が想像以上に荒らされている。

害虫問題：カミキリ虫が枝に幼虫を産み付けたり、実がなると蜂がくるため近隣の迷惑になる。

台風・強風問題：いちじくは強風に弱く、葉が枯れるなどの被害が多かった。

竹・雑草問題：防草シートで覆ったが法面や畑以外の敷地から竹や雑草が生い茂り除草が追いつかない。

広報宣伝活動：SNSの活用方法などに課題が残った。



挿し木ワークショップの様子



DIY CAMPワークショップ開催の様子



挿し木を移植する様子

活動の目的

高松中心部からフェリーでわずか 20 分の所にあるにもかかわらず、限界集落化している女木島。生活や食文化を今現在元気である島の高齢者から聞き取り、後世に残さなければならぬ使命感を持っている。島外者と島のお年寄りの交流が生まれ、今一度女木島独特の文化の掘り起しをすることで、島の人には当たり前だと思われていることの再発見が出来れば、島の皆さんの元気につながると考える。

活動の経過

ワークショップで女木島特産の「にんにく」や「南京豆」、「トウモロコシ」の収穫を島外の人に手伝っていただき、女木島のよさをわかってもらい、女木島に興味を持っていただく。島外の方々に女木島の応援団として島に渡ってきてもらい、農業、漁業のお手伝いをお願いする。

畑でワークショップをしているとご近所さんがそろそろと集まってきてそれぞれが「こうしたらいい」「ああしたらいい」とアドバイスをくれる。

また、かつてはどの家も自分の畑で麦を蒔き収穫した麦の軸で「こも」を作り、暑い夏を涼しく過ごしていたと聞く。今では唯一、民宿竜宮のユキエ母さん一人だけが毎年梅雨に入る前に麦を収穫している。この「こも」作りもユキエ母さんがもう今年で最後、と毎年言っている。ユキエ母さんが元気なうちにきちんと教えていただき絶えないようにする。ワークショップのリピーターが回を重ねるごとに増えた。

活動の成果

最初は「恥ずかしい」「笑われる」と言っていたお年寄りが、今では「教えて」とお願いすると、水を得た魚のごとく知っているすべてを教えてくれる。島外の人たちとも気兼ねなく話が出来るように見受けられる。今までは当たり前のように思っていたことでも、若い子らが「へー」と言うとしっかりと話してくれる。島のおばあちゃんたちには当たり前の事が、島外の人にとっては非常に珍しい事が多くあり、見直されている事がわかってきた。ワークショップを通じ、女木島の良さと人のつながりを感じた方たちが増え、島民と島外の人たちとの交流が増えてきた。お年寄りに「今度は何する」と聞かれることが増えてきた。また「何でも言ってくれたら手伝うよ」とうれしい言葉が聞けるようになった。

桜の木に巻き付いた蔓は木の成長の妨げになり、生い茂ると道路から海が見えなくなる。蔓を刈るのに財産区の土地に入るので、女木の代表者に蔓を刈りたいと相談に行くと「持て余しているのでもんもんで取って構わない。凄く助かる」と言われた。ワークショップ当日も近くの蔓取りを予定していたが、時間の関係で山歩きのスペシャリストにお願いして取っていただいた。これからも季節によって、やらなければならないことが沢山あることに気づかされた。そろそろ島の人たちと実行していこうと考えている。

今後の課題

女木島に興味がある人が大勢いることに気が付き、大変うれしく思った。ますます高齢化が進む島だが、高松中心からわずか 20 分をウリに、女木に遊びに来るのもいいが、ワークショップに来られた方を中心にますます女木島に来てお年寄りとの交流や畑の手伝い、また話し相手になってくれるような環境を作り、島の皆さんのお手伝いができるよう、架け橋となっていきたい。



ユキエ母さんの指導のもと種蒔き最中



こもを編む



意外と男性が蔓にはまっていた

公益財団法人 福武財団

2019年度 自主・共催助成 成果報告書

活動の目的

「瀬戸内」に関係する歴史・民俗・風俗・地理・自然科学などの多様な分野を学術的な観点から捉え、書籍「瀬戸内全誌」としてとりまとめる。瀬戸内とは何かを文明論的に、また、歴史的に追究し、瀬戸内の未来のあり方を考える礎とするとともに、広く国内外に「瀬戸内＝香川」、「アート県香川」を発信するツールとする。

活動の経過

2014 年度から勉強会を開始し、瀬戸内に関連する専門家等による講演会を開催した。

2016 年度からは、「瀬戸内全誌」編纂に向けて章立てや項目の方向性の検討を始めた。検討メンバーとして、県内外の歴史学、民俗学、地理学、生物学、水産学、地質学などの専門家 13 名を選定し、書籍の構成、執筆項目の検討を行うとともに、瀬戸内各地のフィールドワークを開始し、瀬戸内沿岸や島などほぼ全域を調査した。

2017 年度は、現地調査を中心に活動を行い、和歌山県和歌山市、兵庫県洲本市、徳島県鳴門市、山口県下関市、広島県江田島市、兵庫県赤穂市、愛媛県上島町などの島や海岸沿岸部などの調査を行った。また、「瀬戸内全誌」編纂に向けた中間報告書の項目及び執筆者の選定を行った。

2018 年度は、報告会を 5 回開催し、執筆予定のテーマについて、各検討メンバーがその専門性や分野の枠組みにとらわれない視点での意見交換をした。質の高い総合的な書籍「瀬戸内全誌」の根幹となる学術部分の作成に目途がたった。

活動の成果

2016 年度から人文・自然等の分野からなる検討メンバーが瀬戸内全域を対象に現地調査や意見交換を行うことによって、各分野やモノ、コトについてのこれまでの固定的・通俗的な「瀬戸内」のイメージがかなり異なることが明らかになったり、逆に全域に通底したり、海域・地域に特徴的なものがあることがわかってきた。

こうした中、書籍の章立てに当たっては、地域ごと、島ごとという切り口ではなく、「海と島々の間」、「海と陸の間」など、スケールの多様さ、スケールの重層さを念頭に置き、海への視点だけでなく、海域世界の基盤、後背地としての内陸にも目配りするような章立てとした。また、各論においては、個別の事象に偏重せず、その背景に通底するモノ、コトになるべく目を向けた体系的な叙述を目指し選定した。

2019 年度は、原稿検討会を 7 回開催し、各検討メンバーが執筆した原稿の読み合わせや意見交換を行ない、2020 年 3 月に「瀬戸内全誌」中間報告書『「間」から見る瀬戸内－瀬戸内全誌のための素描』を刊行した。

今後の課題

2019 年度に刊行した「瀬戸内全誌」中間報告書『「間」から見る瀬戸内－瀬戸内全誌のための素描』をもとにして、さらに瀬戸内で活動する多分野の専門家や地域の活動家などとの知のネットワークの構築、調査研究の深化などにより、活動の最終目的である「瀬戸内全誌」の方向性を決定し、編纂につながる取り組みが必要である。



香川県立ミュージアムでの原稿検討会

団体名
実施場所大地の芸術祭実行委員会
新潟県 越後妻有地域（十日町市・津南町）代表者名
実施期間関口芳史（十日町市長）
2019年4月～2020年3月

活動の目的

過疎高齢化が進む越後妻有地域内において、地域に内在する価値を、現代アートを媒介して掘り起し、その魅力を高め世界に発信し、地域再生の道筋を築くことを目的とする。

活動の内容

芸術祭ブランドを利用した通年誘客の取り組みとして、春・夏・秋・冬と、『越後妻有里山現代美術館【キナーレ】』や『まつだい「農舞台」』を中心に四季を感じられる企画展を開催した。それぞれの期間、通常は閉館している空き家・廃校作品の限定公開や、イベント・ワークショップ、通年でバスツアーなど、さまざまな企画を行った。越後妻有地方の特徴的な食の提供や、泊まれるアートの存在など、来訪者が里山の魅力を十分に感じてもらえる内容となった。

参加作家、参加人数

四季プログラムの入場、来場者の合計は137,574人。中国の漫画家Tango、香港の絵本作家マオシャーン・コニー、河口龍夫などの作品展のほか、D&DEPARTMENT監修による当地域の食をテーマにした展示などを開催した。他に継続作品、イベント等参加作家多数。

他機関との連携状況

特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構とは、四季の企画展、イベントの開催を連携して実施した。新潟県からは大地の芸術祭事業の実施に関して側面的な支援を受けた。

活動の効果

四季を通じた企画展を開催することで、季節ごとに移り変わる越後妻有の魅力を発信することができた。「大地の芸術祭」の里としてのブランド化と集客の通年化を図ることで地域の持続的な活性化につながっている。大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2021の新作制作に向けた地元住民へのヒアリングや作家の公募も行い、第8回展に向けた準備も行うことができた。

活動の独自性

大地の芸術祭は、アート作品、作品展示場所の自然・風景・食・地域住民との交流など、越後妻有の里すべてを含めたものを「アート」として展開している。第一回展からのリピーターも多く、国・地域・世代ジャンルを越えた人々の交流と協働が新たな価値を見出し、過疎高齢化が進む地域に誇りを取り戻すきっかけとなっている。

総括

季節ごとの企画展やイベントの開催とともに、当地域を代表する景勝地である清津峡渓谷トンネル内のアート作品「Tunnel of Light」が人気を集め、四季プログラムの来場者数は過去最高を記録した。また、今年度から初めて、毎週土日を中心に通年でバスツアーを運行し、年間で867名（65台）が利用した。こうした取り組みを通じて、当地域の魅力を発信することができたと考える。

次年度以降は、今年度の取り組みを継続しながら、大地の芸術祭の里として地域のブランド力向上に努める。また、2021年夏に開催予定の大地の芸術祭に向けて、国内外へ当地域の魅力をさらに強く発信していく。また、アーティスト、サポーター、地域の方々との協働により、多くの方々から楽しんでいただける大地の芸術祭の準備を進めていく。



「Tunnel of Light」の賑わい



Tango漫画展の似顔絵ワークショップ



絵本と木の実の美術館「ヒネモス演奏会」

活動の目的

豊島における棚田をはじめとする山の幸と瀬戸内の地魚である海の幸などを活用し、食とアートの活動を展開することにより豊島の振興を図ることを目的とする。地元の住民、観光客、豊島美術館が一体となったプログラムを開発し、地域振興のための複合的な活動を続ける。

活動の経過

2010年（平成22年）に第1回瀬戸内国際芸術祭が開催。同年に開館した豊島美術館の建設予定地が唐櫃に決定した時点で、香川県から美術館の予定地周辺の環境整備、具体的には棚田の復活を県事業で行いたいの、地元で協力してほしいという依頼があったのが、活動の始まりである。

2009年：4月に発足。補助事業により、棚田の復元作業を行う。

2010年：瀬戸内国際芸術祭2010の開催と豊島美術館の開館に合わせ、周辺環境の整備と棚田の復元作業を行う。

2011年以降：復元した棚田での耕作・維持管理のほか、3年に1度開催される瀬戸内国際芸術祭への協力、また、豊島棚田の収穫祭や季節の野菜の収穫体験を開催し、観光客と地元の交流をととして、豊島の魅力の発信を続けている。

活動の成果

復元した棚田の維持管理業務が活動の中心である。管理された棚田の風景は、隣接した豊島美術館、眼下の瀬戸内海と一体となった絶景であり、観光客だけでなく島民の心にも深く印象付けるものになっている。通常の維持管理のほか、年に3回は、地元住民、福武財団、町役場職員が協力して、用水路の清掃と周辺の草刈りを行い、豊島美術館を訪れた観光客が、いつでも棚田のあぜ道を歩き、昔ながらの農村風景を堪能できる環境を提供している。非常に労力が必要な活動であるが、単なる田畑としての役割だけではなく、豊島の観光資源としての価値を信じて、今後も維持管理を続けたい。

定例のイベントとしては、2か月に1回程度のペースで、季節の野菜などの収穫体験を実施している。特に田植え体験、稲刈り体験、綿摘み体験については、近隣の公共機関及び学校へのチラシの配布、web上での周知等、広く参加者を募集した結果、国内外から50人以上が参加するイベントに成長している。参加者のアンケートの結果もよく、リピーターも多い。

また、年に1回、10月下旬又は11月上旬頃に開催している豊島棚田の収穫祭は、当協議会最大のイベントであり、①地元の子どもの演奏を中心とした棚田ステージ②20店以上が参加する食のマーケット③農業体験の3つを核としており、令和元年度については、瀬戸内国際芸術祭2019が開催されていたこともあり、約1,055人（推計）の来場者数であった。

発足して10年以上経過し、島内外での認知度も高まり、活動も定着してきた。今後も当協議会の目的である豊島の振興のため、各種団体と協力し活動を続けたい。

今後の課題

地元の協力者の高齢化が進んでおり、新しい協力者の加入が、今後も活動を続けるためには必要不可欠である。また、活動全体を牽引できるリーダーの育成も併せて必要である。活動が定着してきた中、今後は、従来の事業をより発展させて行うことに重点をおき、後継者不足の解消、生産物の6次産業化を図り、協議会運営の自立性を高め、さらに豊島の振興に貢献することが課題である。



11月2日開催の豊島棚田の収穫祭での稲刈り体験の様子



11月2日開催の豊島棚田の収穫祭での棚田ステージの様子



6月29日開催の田植え体験イベントの様子

活動の目的

瀬戸内国際芸術祭および「ARTSETOUCHI」活動を通じ、瀬戸内海の美を世界に向けて発信するとともに、会場となる島々の固有の民俗・文化等を現代アートを通じて発見し、さらには各島の住民やこえび隊との心温かな交流などを通じて島々の活性化を図る。

活動の内容

今回で4回目となる瀬戸内国際芸術祭2019では、瀬戸内海の12の島と2つの港を会場に、世界トップレベルの現代アートの作品展示を行うとともに、音楽や演劇、ワークショップなど多様なイベントを実施し、それぞれの会場において、自然、民俗的資源、島の生活や歴史等を活かしたアートプロジェクトを展開した。特に、「瀬戸内の資源に焦点を当てた取り組み」、「アジアとの交流事業」、「島の『食』に関するプロジェクト」、「芝居・舞踏の多様な展開」に重点的に取り組んだほか、北浜エリア、小豆島の四海地区、四国村など新たなエリアでの作品展開を行った。閉幕後においても、芸術祭作品を有効活用し、引き続き地域の活性化を図るために「ARTSETOUCHI 活動」を通年的に実施した。

参加作家、参加人数

瀬戸内国際芸術祭2019には、32の国と地域から230組の作家が参加した。作品数は214点、イベント数は35であった。来場者数は、春・夏・秋会期を合わせて、1,178,484人となった。

他機関との連携状況

地域の産学官で構成される瀬戸内国際芸術祭実行委員会を中心に、関係団体が連携して事業を推進した。また、教育委員会と連携し、地域の学校と連携したプログラムを行った。

活動の効果

過去最多となった来場者による経済効果に加え、外国からの来場者の割合が約23%と前回から約10ポイント増加し、香川・岡山県以外からの来場者の平均滞在日数も延びているなど、本芸術祭は国内外の多くの方の共感を得ており、また、各種メディアにも多数取り上げられ、本県の知名度の向上やイメージアップなど、多くの効果があった。会場となった島々では、地域の特性を生かしたにぎわいづくりや活性化、再生に向けた様々な取り組みが目に見える形で現れており、こうした取り組みが着実に根づいてきている。

活動の独自性

瀬戸内国際芸術祭は、海と島を会場に行われた本格的現代アート展であり、美しい瀬戸内海を船で巡りながら島の自然や文化に溶け込んだアート作品を体感するという、これまでにない新しいスタイルの芸術祭となっている。また、現代アートを媒介として、人と人とのつながりの大切さや、もともとその土地にあった魅力を多くの人々に再認識させ、地域の元気を取り戻すための取り組みとして評価されている。

総括

瀬戸内国際芸術祭2019は、これまでの芸術祭に引き続き、「海の復権」をテーマに、瀬戸内海の12の島々と2つの港周辺を舞台に、春、夏、秋の3会期、計107日間開催し、瀬戸内の資源に焦点を当てた作品や、体験型の作品を展開したほか、アジアの各地域と瀬戸内の島々との連携プロジェクト、島の「食」を味わう食プロジェクト、パフォーマンスの多様な展開に重点的に取り組んだ。また、閉幕後に残る芸術作品を有効活用し、引き続き地域の活性化を図るために「ARTSETOUCHI 活動」として、一部作品の継続公開等を行うことにより、瀬戸内の島々の魅力を継続的に情報発信した。瀬戸内国際芸術祭の開催効果を一過性のものとせず、地域の元気につなげていくためには、継続して事業を実施することが重要であり、芸術祭を中心としたアート活動を展開していきたい。

Photo: Miyawaki Shintaro



旧海員学校を舞台にしたツアー型演劇を公演



栗林隆「伊吹の樹」



こえび隊と来場者の交流